

おすすめ本紹介！！

「こころときめく贈り物」

～高校生にすすめる1冊の本～ 第2号



愛知県教育委員会

高校生のみなさんへ

学校の図書館担当などの先生方が、みなさんにおすすめする本の紹介の第2弾です！

今回は、県内の複数の先生方から推薦のあった本を6冊紹介します。先生方からのメッセージを読んで、「この本に出会えてよかった」と思えるといいですね。

今まで知らなかった新しい世界が広がるかもしれません。
この機会に、ぜひ本に親しんでみよう。



幸せが感じられないという君へ。「幸せってなんですか？」

○ アルジャーノンに花束を



ダニエル・キイス／著
小尾 芙佐／訳
早川書房
1999.10



知的障害者の青年、チャーリーが脳手術を受け、IQが飛躍的に向上していき、今まで見えなかったものが見えるようになりました。しかし、見えてきたことにより、自分への偏見、いじめを知ることとなります。手術を受ける前には無かった孤独感を味わい、苦悩の日々を送ることになってしまいます。

「幸せとは何か」を考えさせられる物語です。

元気になりたい人、癒やされたい人、今すぐ読んでみませんか？



○ 置かれた場所で咲きなさい



渡辺 和子／著
幻冬舎
2012.4



青春時代を過ごしているみなさんは、毎日いろいろな問題に遭遇しているでしょう。学習、部活動、友人、家族……。自分では抱えきれない悩みに押し流されそうになってしまうこともあると思います。著者の渡辺和子さんは幼い頃、父を銃弾によって目の前で亡くされました。その悲しみを乗り越え、神に仕える修道者、また、教育者として今も元気に活躍されています。渡辺さんの貴重な体験から生まれたメッセージはこの時代を生きる私たちに勇気と希望を与えてくれる珠玉の言葉です。一語一語かみしめるように読んでみてください。きっと明るく生きる力が湧いてくるでしょう。

簡単に言うと、どんな立場になっても、どんな仕打ちを受けても、自分が笑顔で幸せに生き、周囲の人々も幸せにするにはどうすればよいか、ということが書いてあります（こんなまとめ方だと、著者に叱られそうですが）。生きるって辛いなあと感じている人、将来は人と接する職に就きたいと考えている人に、ぜひ読んでもらいたい本です。

ここだけの話ですが、私が勤務する高校の定時制課程で、この本を読んでから某短大の推薦入試を受けた人は、100%合格しています（……といっても二人ですが）。字も大きめで、全部で159ページです。一つの章も短いので、読みやすいと思いますよ。



世界中にファンを持つ村上春樹の原点がここに！

○ 風の歌を聴け



村上 春樹／著
講談社
1979.7



「完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね。」——今や世界的にファンを持つ村上春樹の1979年のデビュー作です。兵庫県芦屋市と推測される街に帰省した大学生の「僕」と「鼠」と呼ばれる友人の孤独が洒落な文体で描かれています。思春期に村上作品を読み、さらに作品に描かれた文学作品や音楽などと出会うことで、価値観や世界観が変わったというファンは多いです。村上作品を未読の人、長編小説が苦手という人にもおすすめの本です。

毎年、ノーベル文学賞の候補となり、新作を発表するたびに社会現象を引き起こしている村上春樹のデビュー作。1979年4月に群像新人文学賞を受賞し、第81回芥川賞にノミネートされます。村上自身は「自身が未熟な時代の作品」と評価し、気に入っていないようですが、村上春樹ワールドの原点がここに 있습니다。近年の作品や話題作を読んで難解だと感じた高校生のみなさんは、まず、この作品からスタートしてみてもいいでしょうか。大学生「僕」のひと夏のストーリー。

これからの人生のプラスになる、いつの間にか哲学してしまう本。



○ 君たちはどう生きるか



吉野 源三郎／著
岩波文庫
1982.11



この本は、主人公コペルくんと、そのおじさんの二人が、毎日の生活の中で感じたことや思ったことを交換日記を通じて語り合うというスタイルです。二人の語るエピソードがテーマごとに分けられていてとても読みやすく、おじさんからのアドバイスも哲学っぽいのに説教じみておらず、まさに読む人の心にストーンと落ちてくるのです。この本が発行されたのはずいぶん昔ですが、今読んでも全く色あせておらず、むしろこんな時代だからこそ、よりいっそうの輝きを放っているのです。高校生の皆さんのこれからの人生にプラスとなる1冊です。

大学時代に読んだ時、もっと早く出会いたかったと痛烈に思った本です。ページをめくるたびに心の中にあつた靄（もや）が少しずつ晴れていき、自分の世界が広がっていくのを実感しました。人として正しく心温かに生きていく勇気をくれる本でもあります。

美しい色彩に埋もれたい君へ。光あふれる美術館の扉を開こう！



○ シヴェルニーの食卓



原田 マハ／著
集英社
2013.3

「美しい墓」「エトワール」「タンギー爺さん」「シヴェルニーの食卓」の4話で構成される本書は、膨大な資料をもとに書かれたフィクションです。印象派の画家、アンリ・マティスやドガ、モネらの美しさを追い求めるがゆえのエピソードの数々。彼らに関わった実在の人々が語る形で浮かび上がる人物像と、芸術にかける情熱と魂。清らかな夢を見てきたような酔いとため息の後、あなたは必ず大きな画集を手に取りたくなります。芸術に興味がなくても何の心配もありません。ここおどる小説としてあなたを出迎えてくれるでしょう。

この本はまさに「読む美術館」です。マティス、ドガ、ピカソ、ゴッホ、セザンヌ、モネ。彼らは辛く暗い時代を生きながらも、「光」あふれる絵を描きました。見る人に感銘・感動を与える絵です。「光」あふれる絵を描くために、人生のすべてをかけた者たち。その闘いが描かれている物語です。私たちに情熱を持って何かに打ち込むことの素晴らしさを教えてください。ぜひ読んでみてください。



「壁」と見たものは、実は「成功への扉」だった。



○ 下町ロケット



池井戸 潤／著
小学館
2013.12



「会社に倫理など必要ない。」そう言い切る大企業の横暴に立ち向かうのは、技術力が武器の中小企業、佃製作所。佃が持つロケット水素エンジンをめぐる大企業との息をのむ技術特許裁判。それに勝利した後に訪れたのは、ロケットエンジン部品供給に拘る佃社長と、特許使用料による経営安泰を求める社員たちとのせめぎ合い。次から次へと立ちはだかる壁を乗り越えて、ロケットは無事に宇宙へ旅立てるのか？

「もの作りの醍醐味」と、ハラハラドキドキの「大逆転劇の爽快感」を堪能できます。「壁」と見えるものは、実は「成功への扉」なのだということを教えてくれる作品です。

自分は将来どんな仕事に就けるのか、入ってみてブラック企業ならどうしよう…そんな悩みを超えて、「仕事とは」「生きるとは」を考えさせてくれる本です。最先端の研究者であった主人公は研究失敗の責任をとり、家業の町工場をつぎます。様々な難局に立ち向かいギリギリ乗り切っていきますが、“ものづくりの夢は部品一つにもつまっているんだ”と、熱い思いが湧いてきます。胸のすくようなラストまで一気に読める本です。どんな仕事だって、まわりの何かと繋がり、社会を動かす力になると、元気と勇気をもらえる気がします。

「こころときめく贈り物」～高校生にすすめる1冊の本～は、愛知県内の国立・公立・私立高等学校・特別支援学校(高等部)・中等教育学校(後期課程)の図書館担当など274人の先生方から推薦のあった本や、高校生が友だちにすすめたい本を生徒のみなさんに紹介するものです。

今後発行する号も、充実した内容になる予定です。みなさん、ぜひ楽しみにしてくださいね。

このリーフレットは、「愛知県子どもの読書活動」ウェブページで見ることができます。

→ <http://www.pref.aichi.jp/0000027044.html>

発行：平成27年1月(第2号)

問い合わせ先：愛知県教育委員会生涯学習課

syogaigakushu@pref.aichi.lg.jp

〒460-8534 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

☎052-954-6781 FAX052-954-6962

